

# 38th Australasian Polymer Symposium 参加報告書

(2024年2月19日～2月21日 ニュージーランド オークランド)

Deakin University Institute for Frontier Materials

JSPS 海外特別研究員

近藤 慎司

2022 年度奨学生

渥美国際交流財団 博士号取得者の海外学会派遣プログラムから助成を受け、2024年2月19日～21日にかけて Auckland, New Zealand で開催された「持続可能な社会実現に向けた高分子材料と応用」に関する学会 (38th Australasian Polymer Symposium) に参加し、ポスター発表を行った。

今回の目的は、JSPS 海外特別研究員のフェロースhipを取得し、Deakin 大学に来てから約1年の研究成果を発表する事により、社会還元を行うのは勿論の事、他大学や研究機関と積極的に交流し、意見交換や共同研究に繋げる事である。私が研究対象としているリチウムイオン電池など蓄電池適用に向けた電解質（電池を構成する一部の材料）に関する研究は、脱炭素社会を積極的に目指すオーストラリアでは特にホットなトピックであり、本学会においても多くの関連研究の発表が行われていた。その中で私は、電解質材料に従来用いられていた可燃性の電解質溶液から、高分子を用いた固体電解質に置き換えた研究内容を発表した。難燃性の高分子電解質に置き換える事で、電池短絡時に発火するといった危険性は解決される一方で、電池の充電速度性能に直結する電解質内のリチウムイオンを運ぶ速度が格段に遅くなってしまふという課題が生じる。私の研究では、用いる電解質の分子構造を適切に設計する事で、リチウムイオンの動く速度を向上させた結果を実験と計算で科学的に示した。ポスター発表では、多くの研究者から質問やコメントを受け、活発な議論を行う事ができ、今後の共同研究の話にも繋ぐことができた。

また学会中には夕食会もあり、同年代のポスト

ド研究者と話す機会があった。その中で印象的だったのは、彼らが国際的な研究者とのコネクション作りに非常に積極的に行動している事だった。勿論、それが重要なことは私も分かっていたが、その行動力の高さは全然違った。私の場合、特に著名な教授に話しかけるのは少し気後れしてしまうことがあるが、その研究者達は講演後や夕食会でも積極的に話しかけているのを目にした。英語は決してネイティブレベルではなかったと思うが、臆する事なく質問しているのも見て、少なくとも言語の壁を感じて気後れするのは止めなければならないと強く感じた。私の場合、博士取得後すぐに海外ラボで研究できる良い環境を頂けている。若手研究者のうちに、海外を拠点に研究出来ているからこそ、積極的に海外研究者とのコネクションを築き、自分の研究の強みを伸ばしていく必要があると改めて感じた。この度、日本国内の大学のポジションを獲得し、来月帰国する事が決まった。本学会の参加を含めてこの1年の海外生活を単なる経験で終わらせず、今後の研究者人生に活かしていきたいと思う。

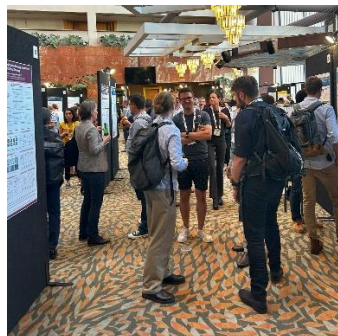


図. ポスターセッションの様子